

平成27年1月

北浦剛 学位論文審査要旨

主 査 藤 井 潤
副主査 清 水 英 治
同 千 酌 浩 樹

主論文

Positive predictive value of true bacteremia according to the number of positive culture sets in adult patients

(成人患者における培養陽性セット数による真の菌血症の陽性的中率)

(著者：北浦剛、千酌浩樹、藤原弘光、岡田健作、早瀬達也、中本成紀、高田美也子、山崎章、井岸正、鰐岡直人、清水英治)

平成26年 Yonago Acta medica 57巻 159頁～165頁

参考論文

1. 再生不良性貧血患者に生じた*Aspergillus viridinutans*による肺膿瘍の1例

(著者：北浦剛、千酌浩樹、室田博美、藤原弘光、唐下泰一、岡田健作、中本成紀、井岸正、鰐岡直人、矢口貴志、清水英治)

平成26年 感染症学雑誌 88巻 855頁～860頁

審査結果の要旨

本論文は血液培養の陽性的中率について菌種別、陽性セット数別に検討したものである。特に陽性セット数別の検討はcoagulase-negative-*Staphylococci*を除き十分に行われておらず、重要な研究である。*Staphylococcus aureus*、coagulase-negative-*Staphylococci*、*Escherichia coli*等の主要な血液培養分離菌において陽性セット数ごとの陽性的中率が明らかとなり、また手術歴が真の菌血症の独立した危険因子であることが示された。菌血症の症例定義に客観的でない指標が含まれている点について議論の余地は残るが、菌血症の厳密な定義は困難である。本論文は過去の論文で用いられてきた指標に準じており、妥当と考えられる。本論文は、臨床感染症学分野で真の菌血症とコンタミネーションを鑑別する有益な情報を提供しており、学術水準を高めたものと認める。